

が詳述されているが、この記述は門人の松岡肇によるもので天保14年（1839）の識から本書刊行年の1851（嘉永4年）年より12年前になる。その凡例に、凡外科大患ヲ療セント欲スルトキハ必先麻沸湯ヲ与ヘ、患者ヲシテ苦痛ヲ知ラシムルコト無カルヘシとし、さらに、麻沸前ノ三診、麻沸受ノ三診トテ前後六診ノ法アリ、此診法ヲ審カニスルコメ先務トスとし、華岡流麻酔の全貌を詳述していることは麻酔史上本書は貴重な文献である。

口腔外科的記載は巻一の第一症例：小兒腮下発肉瘤者一年齡九歳、肉瘤ナリ、之ヲ療セント欲セハ先ツ麻薬ヲ与ヘ快刀ニテ瘤ヲ割キ中ノ挾ヲ取去レハ即チ治ス、その肉瘤全状と割面の彩色図とから上顎肉腫と思考される。第二症例：僧右頰車発骨瘤者一齡四十歳、右頰車故ナクシテ突起ス、三年ニ及フ疼痛セス、余之ヲ按スルニ堅硬石ノ如クニシテ運転セス、思フニ骨瘤ナランとし摘出術を行なっている。なお、骨瘤ト黒膜ニアル瘤トヲ弁

別スルコト甚タ難シ、骨ノ外面ニ被ル膜ヲ骨膜ト云、血絡、神経弥曼シ能ク知覚ス、骨ニハ神経ナキ故ニ知覚ナシ、骨痛覚ユルハ骨膜ノ痛ミシテ骨ノ痛ニ非サルナリ、又、関節等ニ発スル者ハ療スヘカラス、必ズ斃人トナル者也の鑑別診断は特筆されてよい。

巻二の第一症例、男子右観骨上発肉瘤者、一齡四十三歳、十一年前右観骨上小瘤ヲ発ス。諸国ヲ遊歴シ、治ヲ乞フ、医ノ手ニ触ルコト凡ソ三百余人ニ及ヘリ、或は粉瘤ト云、或ハ血瘤ト云、或骨瘤、或翻花瘡ト云、其言一ナラス、予之ヲ見ルニ右観骨上肌肉凸凹トシテ怪岩ノ如ク、右眼塞リテ物ヲ見ルコト能ハス其面実ニ鬼物ニ似タリ、予日此肉瘤ナルモノナリ及び、肉瘤之図、同療後之状、同挾ノ彩色図とから上顎肉腫と思われる。第五症例：男子左頰車骨上発肉瘤翻花者は上顎肉腫の末期と思われるもので術中出血多量と記載されている。なお巻之三～巻之十は次回報告する。

紅毛外科書にみられる歯科口腔外科的記載について

鈴木 勝 新国 俊彦 谷津 三雄*

研究資料の「紅毛秘伝外科療治集」は、全五巻よりなるが、まとめて全1冊、125丁の小冊子（19×13cm）で、カナ交りの刊本である。著者は中村宗璵で、巻末に、中村宗璵著、貞享元歳、菊月吉日、京二条面御幸町西入町、山本長兵衛板のものである。

伊東春琳の序文によると氏ハ中村、名ハ宗璵肥州ノ崎邑ノ人、術ヲ挾テ、京都ニ遊フ、それで京都より出版したのであろう。また、この序文中に「瘍医宗君所著」とあることから、本書は山村宗雪著「阿蘭陀外科指南」が底本と考えられる。

本書の巻一は膏薬部で二十五方の各処方が記載され12丁。巻之二は、金瘡部で、解剖的事項の他に症例の記載があり、31丁。巻之三は諸油部六十三種で、阿蘭陀流の内容が多く、20丁。巻之四は諸草煎液部で、付として紅毛本草があり、13丁。巻之五は、僞証医案図で症例報告集で49丁、よりなる。しかし本文は諸腫瘡医案図となっておる。

これらのうちで、歯科口腔外科的記載および症例は次の如くである。

巻二の金瘡部の解剖的事項に、「胴骨、頭ノ骨髓ハ

色白シテ柔カニ丸クシテ、……髓ヨリ筋二十筋出ル也、二筋ハ目ニ通、二筋ハ^{マツ}瞼胞ト……二筋ハ齒ノ根ニ通、二筋ハ舌ト下アゴニ通ス」又「齒ハ骨ノ余リ他、性ハ寒ニシテ燥也、齒ノ数ハ三十二枚アルモノ也、人ニヨリテ、二十八枚モアリ、齒痛時ハ髓ヨリ齒ノ根ニ通タル筋痛也。腎ノ臟ヘ通ル也」など紅毛秘伝と称しながらも、漢方的記載も多い。

金瘡の症例のうち第1例は20歳の男子で13箇所の外傷、第2例は27～28歳の男子で腹部外傷、第3例は24～25歳の男子で自害で咽喉部外傷、第4例は、40余歳の男子で、左のアハラの外傷。第5例は36～37歳の男子で腹部外傷。第6例は22～23歳の男子で、酒狂で腹を切ったなど6症例が図とともに報告されている。

巻五の諸腫瘡医案図は、96種類の疾患についての症例報告集で、その生別は男子74例、女子22例であり、年齢別は生後17日～9歳、7例、10歳台、7例、20歳台、17例、30歳台、11例、40歳台、11例、50歳台、10例、60歳台、9例、80歳台、1例、不明23例である。なお、本書の症例について、阿知波氏が第64回日本医史学会総会の特別講演、近代日本外科学の成立のなかで、金瘡の症例例は5例、諸腫瘡案図における症例は81例、計86例と報告しているが、演者らは金瘡6例、諸腫瘡案図96例で計

* 前出

102 例であり、しかも阿知波氏は70歳以上はないというのが80歳台が1例記載されている、すなわち症例2(2丁)に「此大頭瘡八十余歳ノ婦、初発粟粒ノ如ク」と、口腔外科症例と記載ページは次の如くである。

○17丁に齒疳、五六歳、死(今日の水瘡か?)

○18丁に欠唇、予療治シ、二十日ニ平癒ス、但仕掛口伝アリとあって、その術式は記載されていない。

○27丁に、大舌兩人ヲ見ニ不愈、無可及療治(今日の舌瘡)

○30丁に耳ノ後ニ身色ニ腫テ痛ム事甚シ、日数十四五日、廿日至リテウム、腮ヨリロヲアケテ如图骨ヲ出シ

快氣ヲ得タリ、(下顎骨々髓炎腐骨?)

○44丁に六十余歳ノ男ワヅカノ堅ミ出テ兩年ノ後少ツツ大ニ成テ痛、色赤クナル……先医灸テ……外科ニ三人替テ後療治ヲ乞、十日余療治スル無程

死スル也。是則結核ノ類ナリ(今日の結核ではなく、下顎癌の頸部リンパ節転移)など6症例の記載がある。なお、従来、わが国で兔唇の手術を最初に行なったのは嵐山甫安で貞享4年(1687)とされているが、本書の刊行は貞享元年(1684)であるので、本書の欠唇の症例は、それより先であると考証される。